

説得場面における送り手の非言語情報の有無が受け手の心理的リアクタンス及び、知覚された説得力に及ぼす影響について

——スピーチ速度に着目して——

川向大樹（指導：薊理津子准教授）

キーワード：非言語的コミュニケーション、スピーチ速度、心理的リアクタンス、知覚された説得力、信頼性、専門性

問題・目的

非言語的手がかりが説得効果に影響を及ぼすことが明らかにされている (Burgoon & Pfau, 1990)。本研究では、非言語的手がかりの中でも、スピーチ速度に着目する。国外では、速いスピーチ速度の方が遅いスピーチ速度よりも、話し手に対する信憑性を高め、話し手の説得効果を高めることが示されている (Miller, Maruyama, Beaver, & Valone, 1976)。しかし、国内では逆の研究結果が得られている (藤原, 1986)。更に、横山・大坊 (2008) では、藤原 (1986) の結果が再現されず、また、遅いスピーチ速度が話し手の信頼性を高め、速いスピーチ速度が話し手の専門性を高めるという結果が得られている。藤原 (1986) と横山・大坊 (2008) に実験材料に関する詳細な記述がないため、実験を再現して検討し直すことが難しい。そのため、本研究では実験材料を選定し直した上で、スピーチ速度が説得効果に及ぼす影響を改めて確認する。また、これまで非言語的手がかりの有無による心理的リアクタンスの影響がされていない。心理的リアクタンスとは唱導方向への態度変容の妨げであり、これが生じた場合には説得に応じない行動がとられる (Dillard & Shen, 2005)。

そこで、本研究の目的は、説得的メッセージに非言語的手がかりのあるスピーチ速度が速い群 (以下、Fast 群) と遅い群 (以下、Slow 群)、非言語的手がかりのない文字のみ群を設定し、各群による説得効果の違いについて検討する。また、説得効果に加え、心理的リアクタンス (リアクタンス特性と状況的リアクタンス) についても検討する。

仮説は3つある。文字のみ群よりも Fast 群と Slow 群の方が、また、Fast 群よりも Slow 群の方が説得効果が高まり (仮説 1a)、状況的リアクタンスが喚起しにくい (仮説 1b)。信頼性は、文字のみ群よりも Fast 群と Slow 群の方が高まり、Fast 群よりも Slow 群の方が高まる (仮説 2a)。専門性は、文字のみ群よりも Fast 群と Slow 群の方が高まり、Slow 群よりも Fast 群の方が高まる (仮説 2b)。文字のみ群、Fast 群、Slow 群の順に、リアクタンス特性が高い人ほど状況的リアクタンスが喚起しやすく (仮説 3a)、説得効果が低くなる (仮説 3b)。

方法

実験参加者 大学生 47 名 (男性 21 名、女性 25 名、未回答 1 名、平均年齢 20.17±0.96) が実験に参加した。

実験時期 実験は 2021 年 9 月 24 日—10 月 8 日に実施した。

実験計画 刺激の提示方法を要因とし、Fast 群、Slow 群、文字のみ群を水準とした参加者間計画であった。

実験材料 予備調査に基づき、回答者の関心が高かった改正少年法を材料とした。予備調査では、改正少年法に対して賛成傾向であったため、本実験ではそれを否定する唱導方向の意見文として「改正少年法の問題点」の両面呈示メッセージ (1901 文字) を作成した。Audacity ver2.4.2 を利用して、Fast 群と Slow 群を作成し、参加者には音声のみを提示した。文字のみ群では意見文を文章で提示した。

実験方法 実験は Google フォームを利用して行われた。筆者の指導教員が担当する授業の Classroom に Google フォームの URL を掲載し、参加者を募った。なお、本実験は江戸川大学社会学部人間心理学科「人を対象とした研究」倫理審査小委

員会の承認を得た上で行われた。

質問内容と項目 ①フェイスシート (年齢、性別)、②事前態度 (意見文に対する賛否と関心の度合いを測定、7 件法)、③説得的メッセージの送り手に対する信頼性と専門性 (大坊 (1978) より 2 項目ずつ、7 件法)、④スピーチ速度の操作の妥当性 (7 件法)、⑤知覚された説得力 (横山・大坊 (2008) を参考に測定、7 件法)、⑥メッセージの理解度 (横山・大坊 (2008) を参考に作成した説得的メッセージの内容の正誤を問う 8 項目)、⑦状況的リアクタンス (大谷・山村 (2017) を参考に作成した 7 項目、7 件法)、⑧心理的リアクタンス尺度 (今城 (1993) より 12 項目、7 件法) を測定した。なお、説得的メッセージは①②の回答後に、法学専攻の男子大学院生によるものとして提示し、1 回のみ視聴 (読む) よう求めた。

結果と考察

操作の妥当性 スピーチ速度の操作の妥当性について、Fast 群と Slow 群を独立変数とした参加者間計画の 1 要因分散分析を行った。その結果、スピーチ速度の有意な主効果が得られた ($F(1, 30) = 83.08, p < .001$)、操作が妥当であることが確認された (Fast 群 $M = 6.56, SD = 0.81$; Slow 群 $M = 2.69, SD = 1.49$)。

仮説 1 と 2 知覚された説得力、状況的リアクタンス、信頼性、専門性について、刺激の提示方法を独立変数とした参加者間計画の 1 要因分散分析を行った。その結果、知覚された説得力については有意な主効果が得られなかった ($F(2, 44) = 0.05, ns$)。状況的リアクタンスについては有意傾向が得られたが ($F(2, 44) = 2.50, p < .10$)、多重比較の結果、いずれの条件間においても有意差は示されなかった。ゆえに、仮説 1a と仮説 1b は支持されなかった。

信頼性においては有意傾向が認められたものの ($F(2, 44) = 3.05, p < .10$)、多重比較を行ったが、いずれの条件間においても有意差は示されなかった。専門性においては、有意な主効果が得られた ($F(2, 44) = 5.71, p < .01$)。多重比較から、文字のみ群よりも、Fast 群の方が専門性が高く評価された (Fast 群 $M = 6.16, SD = 0.96$; Slow 群 $M = 5.25, SD = 1.13$; 文字のみ群 $M = 4.77, SD = 1.39$)。つまり、仮説 2a は支持されなかったが、仮説 2b は部分的に支持された。

仮説 3 群ごとで、心理的リアクタンス尺度、知覚された説得力、状況的リアクタンスの間の相関係数を算出した。Fast 群において、いずれの変数間に有意な相関は認められなかった。Slow 群において、心理的リアクタンス尺度は知覚された説得力との間に有意な負の相関 ($r = -.56, p < .05$)、状況的リアクタンスとの間に有意な正の相関が認められた ($r = .56, p < .05$)。文字のみ群において、心理的リアクタンス尺度は知覚された説得力との間にのみ有意な負の相関が認められた ($r = -.64, p < .01$)。3 群の中で文字のみ群は、心理的リアクタンス尺度と知覚された説得力との間に最も強い関連性があったことから、仮説 3b は部分的に支持された。

まとめ 仮説 2b と仮説 3b を除き、仮説は支持されなかった。送り手の性別と説得的メッセージの交互作用がある可能性や、Web で実施したがゆえの実験参加者の環境統制のしづらさが、剰余変数として影響した可能性が考えられる。今後はこれらの点を考慮・改善した検討が必要であろう。